

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25770262

研究課題名(和文)近代ロシアにおける正教系定期刊行物と世論形成との関係についての研究

研究課題名(英文)The Orthodox Periodical and Public Opinion in Modern Russia

研究代表者

巽 由樹子(Tatsumi, Yukiko)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師

研究者番号：90643255

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀後半ロシアで聖職者身分を離れて「神学ジャーナリスト」となったA・ポポヴィツキーの活動を分析して、従来、世俗的な出版活動からのみ論じられる傾向が強かった近代ロシアの世論形成について新たな知見を加えることを目的とした。彼が創刊したロシア初の絵入り正教週刊誌『ロシアの巡礼者』の論調や、大手出版社ソイキンの支援による購読者数の増大からは、先行研究が想定した以上に、近代ロシア社会の読者大衆のあいだで信仰と伝統的価値観が影響力を持ち続けていたこと、そして、そのような側面を含めて包括的に公論の形成を分析する必要があることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to reveal how the religious press as well as the secular press contributed to the formation of public opinion in late nineteenth-century Russia, by featuring the works of Alexander Popovitsky who left the clergy estate and became a journalist in the secular publishing world. 'Russkii Palomnik' (Russian Pilgrim), the first Orthodox weekly in Russia founded by Popovitsky, and his strong connection with the Soikin Company, one of the representative secular publishers, would indicate that the traditional values and faith still had a great effect on public opinion even in the cities after the Great Reforms, to which the previous studies did not pay enough attention as they tended to focus on the intelligentsia and their secular publishing activity.

研究分野：歴史学

キーワード：ロシア史 近代 正教 メディア 出版

1. 研究開始当初の背景

農奴制廃止をはじめとする「大改革」により、1860年代以降、ロシア社会の構造は大きく変化した。そして専制国家が社会といかなる関係を結び、いかに国民を統合したかを論じるために、世論形成や公共圏の問題が注目されてきた。これを分析するための重要な材料のひとつが当時の出版活動だが、先行研究は世俗的な出版に関心を集中させる傾向があった。だが、正教研究の分野においては近年、19世紀後半の教会と社会との関係を見直す成果が現れつつある。たとえば Laurie Manchester, *Holy Fathers, Secular Sons: Clergy, Intelligentsia, and the Modern Self in Revolutionary Russia*, (DeKalb: Northern Illinois Univ. Pr, 2008)は、聖職者身分の若者たちが自ら俗人身分に転籍し、神学にもとづく教養を身につけた知識人として、世俗的インテリゲンツィヤと異なる立場から社会改良運動に取り組んだことを指摘した。一般にロシア正教会は国家の御用教会だったとイメージされることが多かったが、マンチェスターをはじめとする研究者たちは、聖職者身分もまた社会運動に関わり、世俗社会へ働きかけようとしたことに注目するようになったのである。こうした新しい動向に属する研究が、Нетужилов К.Е. *Церковная периодическая печать в России XIX столетия*. СПб., 2008である。これは、正教会の関連諸団体による出版活動を初めて体系的に明らかにした。すなわち、19世紀のロシアでは世俗的な出版だけでなく、正教出版もまた活発に行われていたことが示されたのだった。

2. 研究の目的

以上のことから、正教会の社会活動が世論形成に大きく作用するファクターだったと想定し、本研究課題は正教会の出版を分析し、自身のこれまでの業績を含む世俗出版の先行研究と擦り合わせることで、19世紀半 - 20世紀初頭ロシアの世論形成の様相を包括的に明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究課題の申請にあたっては、「(1)聖職者身分出身の俗人文筆家たちの世論形成における役割」「(2)『主教管区報』のメディア分析」「(3)出版分野における国家と正教会との関係」の三点を解明すべき課題として仮説的に示した。しかし、初年度に集めた資料を読み進めるうちに、このうち特に課題(1)が、世俗化するロシア社会と正教信仰との狭間で形成された世論を考察するにあたって、有望な論点であると判断した。それゆえ、次年度以降、主として課題(1)を分析の中心に据えた。

聖職者身分出身の俗人文筆家という存在が特異であり、世論形成に固有の役割を果たしたと考えられるのは、次のような背景事情による。ロシアの聖職者身分は、司祭職の世襲を伝統とし、閉鎖性を特色とした。だが、法的身分間の流動性を向上させることで近代化の実現を意図した1860年代の「大改革」は、聖職者の子弟が、学校卒業後に他の職業に就くことを奨励する政策をとった〔橋本伸也(2010)『帝国・身分・学校—帝制期ロシアにおける教育の社会文化史』名古屋大学出版会〕。その結果、司祭の子息たちのうちから、世俗出版界で言論活動を展開する文筆家が多数現れたのである。「ポポヴィッチ」と渾名された彼らは、従来の研究ではほとんど注目されなかったが、家庭から正教的教養を、学校から西欧的教養を受容した、いわゆるロシア・インテリゲンツィヤとやや系譜を異にする知識人であり、世論の形成者でもあったと考えられる〔Manchester(2008)〕。

申請者は、このような世俗出版界における聖職者身分出身ジャーナリストについての一次史料を探索する中で、その一類型たるアレクサンドル・ポポヴィツキーという人物と、彼が大手商業出版社の傘下で刊行したロシア初の絵入り宗教週刊誌『ロシアの巡礼者』に行きあたった。そこで、彼の出版活動とこの雑誌の分析に取り組んだ。

4. 研究成果

本研究課題の遂行により、史料から明らかになったことは次の通りである。

アレクサンドル・ポポヴィツキー(1826 - 1904)は司祭の息子に生まれ、神学アカデミーを卒業したエリート聖職者であったが、拡大する世俗社会の中に信仰と道徳心を保持させようとの使命感から、聖職者身分を離れて出版界に入り、「神学ジャーナリスト」を自称した。ただし彼が編集人となって刊行した初期の新聞、雑誌はいずれも読者を得られずに失敗した。そのため、彼は流行のメディアだった絵入り週刊誌という形態を採用することを思いつき、1885年、ロシア初の絵入り正教週刊誌『ロシアの巡礼者』を創刊した。

同誌は1896年、ピョートル・ソイキンという出版社主に買い取られた。ポポヴィツキーを編集人としつづけたことから、不振に陥りつつあったこの雑誌の支援が目的だったと考えられる。ソイキンは、科学専門の絵入り雑誌『自然と人間』を刊行して大きな成功をおさめ、ソ連時代には、「民主的、科学的思想のプロパガンダに尽力し、革命に貢献した啓蒙的出版人」と顕彰された人物である。だが、実際には彼は解放農奴の子として農村に生まれた正教徒であり、正教雑誌を買い取って自社の第二の看板雑誌に育て上げたのだった。科学出版社が正教雑誌をも刊行して

いたという、社会主義体制の建国神話から逸脱した事実は、ソイキン本人がロシア革命後に隠蔽したために忘却されていた。

そこであらためて、ポポヴィツキーがソイキン社という出版大手のもとで正教雑誌を出していたことに着目すると、その意義は次のように述べるができる。ポポヴィツキーは、農村で共有された伝統的な価値観や信仰を尊重して、ナロード（民衆）が理解しやすく、共感しうるコンテンツを提供した。この点で、ナロードの教化を志した世俗知識人の啓蒙活動とは一線を画していた。たとえば、世俗知識人の率いた民衆啓蒙を目指す協会団体やゼムストヴォは、民衆啓蒙のために、宗教的、道徳的説話を含む、「汚い紙に印刷された教訓的読み物」を撲滅して、自らが刊行した良書を広めることを目指した。それに対して『ロシアの巡礼者』は、「民衆の間の宗教画」と題する 1891 年の記事で、ナロードが理解できる媒体を尊重すべきだと主張している。このような主張を持つコンテンツが、営利性を追求する出版大手ソイキンによって、広告を打たれ、ロシア国内の広範囲で販売された。すなわち、世俗知識人の出版活動とは異なる文脈の刊行物もまた、近代ロシアの出版業界に存在し、相当程度の部数が流通していたのである。

こうした正教出版からは、世俗的な出版活動とはやや異なる受容者像が描出される。すなわち、自らの伝統的な世界観や信仰を尊重するコンテンツを用意されて、主体的な購読者としてマス・メディアに接するようになったナロード読者の姿である。世俗的なインテリゲンツィヤとその出版活動を論じてきた従来の研究では、ナロードは啓蒙され、教導される受動的な存在だと見做される傾向があった。だが、聖職者身分出身の俗人ジャーナリストの活動に着目するならば、ナロードは自ら読み物を選んで購買する、主体的な消費者という性格も持っていたと言えるのである。以上の分析からは、近代ロシア社会の世論のうちには、信仰と伝統的価値観に立脚した領域があった、と考えることができるだろう。20 世紀初頭にかけて正教出版は成長を続けたのであり、帝政末期の公衆のあり方について論じるにあたっては、なお精査されるべき事象である。

*

2013 - 2017 年度の 5 年間をかけて本研究課題に取り組むにあたっては、「調査→中間報告としての学会発表→最終的な成果公開としての論文の刊行」という段階を踏んだ。

2013 年度は、本研究課題に関する基礎的な資料の収集を行った。その際、まず国内での史料所蔵状況を把握して必要資料を入手してから、滞在時間が限られる国外での資料収集を行い、調査作業の効率化に努めた。すなわち 2013 年中は東北大学東北アジア研究セ

ンター、早稲田大学、北海道大学スラヴ研究センターで、研究文献と、マイクロフィルムとして所蔵されている正教系定期刊行物とを閲覧、複写した。つづいて、2014 年 3 月にサンクトペテルブルクに渡航し、ロシア国立図書館で代表的な正教ジャーナリストの一人アレクサンドル・ポポヴィツキーについての史料と、彼が刊行した絵入り正教雑誌『ロシアの巡礼者』のマイクロフィルムを閲覧、複写した。

2014 年度は、学会発表を主眼とした。すなわち、5 月に日本科学史学会でのパネル「19 世紀ヨーロッパのポピュラー・サイエンス」に参加し、19 世紀のイギリスおよびドイツの科学知に関する諸報告と並んで、「19 世紀後半ロシアの出版メディアとポピュラー・サイエンス—帝政末期の通史を再考するための事例として」と題した口頭報告を行った。その内容は、2015 年 1 月に刊行された『科学史研究』に掲載された。また、この他に、論文「19 世紀後半サンクト・ペテルブルグにおけるポーランド人の出版活動—地理書『絵のように美しいロシア』の刊行をめぐって」および共訳書『遊ぶ ロシア：帝政末期の余暇と商業文化』（ルイーズ・マクレイノルズ著）を刊行した。前者は 19 世紀後半ロシア帝国における出版業者の宗派性について、後者は同時期のロシアにおける大衆文化の実相についての研究であり、これらに取り組んだことで、本研究課題の背景要因について考察を深めることができた。

2015 年度は、中央ヨーロッパ大学（ハンガリー）において在外研修の機会を得たため、英語圏での口頭発表に力を入れた。特に 6 月 29 日 - 7 月 4 日にかけて、欧州各地の研究者が集まるサマーユニバーシティ "Cities and Science: Urban History and the History of Science in the Study of Early Modern and Modern Europe" に参加し、"Popular Science and Late Imperial Russian History" と題して報告できたのは有益だった。また、派遣先大学は欧州における科学史研究の拠点のひとつだったため、所属研究者との意見交換や資料情報の供与により、視野を広げることができた。この他に、7 月にはサンクトペテルブルクに渡航し、ロシア国立図書館と市内の古書店で、正教ジャーナリズムに関係する一次史料を数多く入手した。

2016 年度は産休・育休を取得したため、研究期間を一年延長することを申請し、認められた。ただし、ロシア帝国史に関する論文集のプロポーザルを英国の出版社に提出し、採択されるという成果があった。

最終年度にあたる 2017 年度は、研究成果を活字化して公刊する準備にあてた。すなわち、(1) 単著刊行のための原稿の完成と、(2) ロシア帝国の出版史に関する英語論文集の編集である。(1) については完成稿を 11 月に科研費（研究成果公開促進費）に応募し、翌春に採択の内定を受けることができた。

(2)については、まず9月に、寄稿予定者の一人であった、ロシア帝国のヴォルガ・タタール共同体における写本・印刷本の専門家をユタ州立大学より招き、国内のフランス教育史の専門家の参加も得て、国際ワークショップを実施した。この際、自身は'Religion and Media in Late 19th-Century Russia: A Case Study of Orthodox Journalist A. Popovitsky'とのタイトルで報告した。この招聘によって執筆内容について議論を詰められたことと、その後の論文集の編集作業において円滑に連絡がとれる関係を築けたことは、きわめて重要な成果だった。そのうえで、2018年1-3月にかけて、論文集の編集を共編者とともに進め、入稿の目処をほぼつけることができた。なお、本研究課題に間接的に関わる業績として、ロシア革命を出版という側面から考察した一文「帝政末期の社会とツァーリの表象」(『ロシア革命とソ連の世紀 第1巻』所収、6月)と、学会報告「ロシア革命と文化史研究」(11月)をおこなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

巽由樹子、〔書評〕ゲーリー・マーカー著(白倉克文訳)『ロシア出版文化史：18世紀の印刷業と知識人』、ロシア語ロシア文学研究、査読あり、47、2015、pp. 309-314

巽由樹子、19世紀後半ロシアの出版メディアとポピュラー・サイエンス：帝政末期の通史を再考する手がかりとして、科学史研究、査読あり、54(272)、2015、pp. 68-75

〔学会発表〕(計6件)

巽由樹子、ロシア革命と文化史研究、早大ロシア研究所・東北大西洋史研究会シンポジウム「世界史の中のロシア革命」、2017

Yukiko Tatsumi, Religion and Media in Late 19th-Century Russia: A Case Study of Orthodox Journalist A. Popovitsky, Workshop 'Religion, Education, and Literacy in the Age of Modernization', 2017

Yukiko Tatsumi, A comment for the panel 'Center - Periphery - Borders' in European History, Symposium 'Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History', 2017

Yukiko Tatsumi, A comment for the panel 'Liberalism reconsidered in the European modernity', Symposium 'Constructing a new concept of European history from historical experiences of borderlands', 2016

Yukiko Tatsumi, Non-Russian Publishers and Russian press in the Russian Empire, ICCEES IX World Congress, 2015

巽由樹子、19世紀後半ロシアの出版メディアとポピュラー・サイエンス - 帝政末期の通史を再考するための事例として、日本科学史学会、2014

〔図書〕(計4件)

巽由樹子、帝政末期ロシアの官僚と出版、池田嘉郎・草野佳矢子 編著、刀水書房、国制史は躍動する：ヨーロッパとロシアの対話、2015、188 - 208

Yukiko Tatsumi, Russian Critics and Obschestvennost', 1840-1890: The Case of Vladimir Stasov, Matsui Yasuhiro (ed.), Palgrave Macmillan, *Obschestvennost'* and Civic Agency in Late Imperial and Soviet Russia: Interface between State and Society, 2015, 16-33

巽由樹子、19世紀後半サンクト・ペテルブルグにおけるポーランド人の出版活動：地理書『絵のように美しいロシア』の刊行をめぐって、橋本 伸也編、昭和堂、ロシア帝国の民族知識人—大学・学知・ネットワーク、2014、197 - 220

巽由樹子、帝政期ロシアの定期刊行物と科学、宗教、革命 - ソイキン出版社の事例から、中嶋 毅 編、山川出版社、新史料で読むロシア史、2013、53 - 71

6. 研究組織

(1)研究代表者

巽 由樹子 (TATSUMI, Yukiko)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師

研究者番号：90643255

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし